



Data 2025-116

監督・脚本: 大森立嗣
 原作: 飯島虚心『葛飾北斎伝』(岩波文庫刊)、杉浦日向子『百日紅』(筑摩書房刊)より「木瓜」、「野分」
 出演: 長澤まさみ/高橋海人/永瀬正敏/大谷亮平/篠井英介/奥野瑛太/寺島しのぶ/和田光沙/吉岡睦雄/早坂惇人/笠久美/一華/小林千里

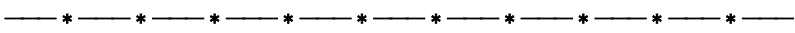
👁️👁️ みどころ

「おーい、お茶」ならわかるが、「おーい、応為」って一体ナニ？葛飾北斎は世界に誇るべき日本人アーティストだが、「応為」はその娘で、「美人画を描けば父親を凌ぐ」と言われた女浮世絵師・お栄の雅号だ。

お栄の物語はTVドラマ『眩(くらら)～北斎の娘～』やその原作小説等で有名。また、「北斎モノ」の代表は『HOKUSAI』(20年) (『シネマ49』164頁)だが、大森立嗣監督はお栄(応為)の人生(生きざま)に焦点を当て、長澤まさみに何とも魅力的な役柄と演技を演出！

江戸時代末期の1820～40年代(=NHK大河ドラマ『べらぼう』の主人公・髯屋重三郎が生きたのと同じ時代)に活躍したお栄(応為)は“北斎の娘”として、また“女浮世絵師”として、どんな人生(生きざま)を？

こりゃ面白い！ウーマンリブや女性解放を叫ぶ前に、葛飾応為のような、己に忠実で毎日精一杯の生き方をしっかり学びたい。



■□■長澤まさみが大森立嗣監督とのコンビで時代劇に挑戦！■□■

本作は、阪本順治、井筒和幸らの現場に助監督として参加し、『ゲルマニウムの夜』(05年)でデビューし、近年は『日は好日』(18年) (『シネマ43』270頁)、『MOTHER マザー』(18年) (『シネマ47』未掲載)等を世に送り出してきた大森立嗣の監督・脚本作品！本作のパンフレットの中で彼は、本作の脚本は「かれこれ10年ぐらい前に書いていたものですね。当時杉浦日向子さんの漫画『百日紅』を読んで、それがすごく面白かったんですよ。お栄という女性像がとにかくカッコよくて、今回の映画にもこの漫画からどうしても使いたいなというシーンを入れさせてもらっていますし、脚本の根っこに百日紅の存在は大きくあったと思います。」と語っているが、“お栄”って一体誰？

他方、2000年の第5回「東宝シンデレラ」オーディションでグランプリを受賞して女優デビューし、行定勲監督の『世界の中心で、愛をさけぶ』（04年）（『シネマ4』122頁）で日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞した本格派大型女優（？）長澤まさみは、近時『キングダム』シリーズ（『シネマ43』274頁、『シネマ51』158頁、『シネマ53』217頁、『シネマ56』104頁）での活躍が目立っているが、本作では『MOTHER マザー』に続いて大森立嗣監督と2度目のタッグを組み、“お栄”の役で、初の時代劇に挑戦！

もっとも、時代劇といっても、本作はキムタクこと木村拓哉が『武士の一分』（06年）（『シネマ14』318頁）で初めて山田洋次監督とタッグを組んだ時のような本格的時代劇ではなく、2025年のNHK大河ドラマ『べらぼう』とほぼ同じ時代（1820～49年）の時代劇だから、本作では刀の斬り合いではなく、長澤まさみ演じるヒロイン・葛飾お栄の生きザマやファッションに注目！

■□■このタイトルは？おふざけ？語呂合わせ？否、雅号！■□■

日本では「おーい、お茶」のコマーシャルが長い間流行っているが、本作のタイトル『おーい、応為』とは一体ナニ？これはおふざけ？語呂合わせ？いやいや、そうではない。「応為」は、父親であり絵の師匠でもある葛飾北斎から、娘のお栄が浮世絵師として授かったレッキとした“号”だ。「葛飾応為」の雅号で葛飾お栄が残した絵は、「吉原格子先之図」、「夜桜美人図」、「百合図」等多くはないが、決して父親のモノマネではなく、「日本のレンブラント」と称されるほど素晴らしいものだから、それに注目！

もっとも、タイトル前段の「おーい、」は“出戻り”となった（娘の）お栄と（父親の）北斎との2人だけの生活が長く続く中、父親が娘をいつも「おーい、筆」「おーい、飯」等と声を掛けていたためだから、やっぱり本作のタイトルは、「おーい、お茶」のコマーシャルと同じように、おふざけ？そしてまた、語呂合わせ？

■□■お栄の生きザマは？原作にもTVドラマにも注目！■□■

本作の原作になったのは、第1に朝井まかての長編小説『眩（くらら）』（16年）、第2は杉浦日向子『百日紅（筑摩書房刊）』のうち「木瓜」、「野分」だ。大森立嗣監督が約10年前に本作の脚本を書くについて、「脚本の根っこに『百日紅』の存在は大きくあったと思います。」と語っているのは前述のとおりだが、私はこの『百花紅』は読んだことはない。しかし、『眩』の方は、同作をNHKがTVドラマ化した『眩～北斎の娘～』をしっかりと鑑賞したこともよく覚えている。同作で葛飾応為役を演じたのは宮崎あおい、そして父親の北斎役は長塚京三だった。

私は葛飾北斎についてはさまざまなドラマを観てきたが、その娘で父親と同じ浮世絵師として生きた葛飾応為＝葛飾お栄のことを知ったのは、同ドラマをを観たのが最初だった。そこでは、あの時代にもこんな“女一匹”の生き方があったのかと大いに感心しながら興味深く、葛飾応為の人生（生きザマ）を見守ったものだ。もっとも、同作には、お栄とお栄の兄弟子、善次郎（松田龍平）との恋物語や、葛飾北斎と北斎の親友滝沢馬琴との友情

等が多層的に描かれていたが、本作は『おーい、応為』とタイトルされているとおり、お栄と北斎との父娘の絆と2人の生きざまに焦点を絞っている、それに注目！

■□■「葛飾北斎モノ」はいろいろあり！本作の特徴は？■□■

日本人にはあまりその名前を知られていない葛飾お栄に対して、葛飾北斎の方はチョー有名。「葛飾北斎モノ」の代表作は、青年期の北斎を柳楽優弥が、老年期の北斎を田中泯が演じた『HOKUSAI』（20年）（『シネマ 49』164頁）だが、同作もTVドラマ『眩～北斎の娘～』と同じく、とりわけ前半では絵や本の版元であり、出版販売もしている耕書堂の店主蔦谷重三郎（阿部寛）や、美人画のアーティスト滝川歌麿（玉木宏）らが登場するとともに、後半では歌麿、写楽、馬琴、北斎等の個性豊かな男たちの葛藤が重層的かつ多角的に描かれていた。そして、人生末期の北斎については、娘のお栄を残して一人旅に出かけ、海の遥か先に見える富士山や、峠道の頂上でご来光を受けて紅く染まった富士を目に焼き付けながら、「富士越龍」や「赤富士」の作品を描き続ける姿が印象的だった。したがって、同作には当然お栄＝葛飾応為も登場していたが、それはあくまで脇役で、主役はあくまで父親の北斎だった。しかし、『おーい、応為』と題された本作はそうではなく、お栄＝応為の人生（生きざま）に焦点を当てたものだから、そんな本作に登場する父親・北斎の人間像はかなり控え目・・・？そう思ったが、いやいや、やっぱり・・・？

■□■妻は失格！しかし、嫁として絵師としては超一流！■□■

夫婦喧嘩は「犬も食わない」ものとされているが、大森監督は本作冒頭にあえてそんなシーンを配置した。「夫婦喧嘩をテーマにした映画」といえば、中国の徐静蕾監督の『我愛你！』（03年）（『シネマ 17』345頁）が強烈だったが、本作冒頭は、嫁のお栄が浮世絵師の夫に向かって「下手くそ！お前の絵はカッコだけなんだよ」とボロクソに罵倒し、「出て行け！」と怒る夫に対して、「こっちから出て行ってやらー」とタンカを切る、ド派手な夫婦喧嘩のシーンからスタートするので、その姿に注目！私は『世界の中心で愛を叫ぶ』（04年）で日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞した当時の長澤まさみのイメージが強く残っているから、近時の『キングダム』シリーズにおける彼女の演技には驚いていたが、本作冒頭の夫婦喧嘩のシーンに見るタンカの切り方の見事さにもビックリ！清楚な少女も中年になればここまで変わるものだど痛感！

それはともかく、そんな風にタンカを切って夫婦の縁を切り、夫の家を出ていったお栄だか、離婚に伴う妻の権利が法的に手厚く整備されている現在と違い、1820～40年代の江戸時代の日本にあっては、“出戻り”の中年女がどうやって生きていくかは大問題だ。そこで、とりあえず父親の家に戻ったのは仕方ないが、父親からは「早く出て行け」と露骨に言われたから大変だ。しかし、本作では“出戻り女、お栄のたくましさ”に注目！お栄は料理、裁縫等、当時の女がすべきことのほとんどができなかったそうだが、そんなことを一切気にしないところがすごい偉い。家の中は散らかし放題で平気だし、父親が絵を描いている最中に自分はキセルでぶかぶかやりながら我が道を模索中だから、当時としては

大した玉（女）だ。またスクリーン上では、父親から「おーい、筆」「おーい、飯」と言われるままに筆を出し、飯を出す風景は登場しないが、父親が絵を描くについてお栄は、いろいろと献身的に尽くしたらしい。さらに、お茶も入れられず針仕事もできないお栄だったが、絵の才能だけは父親譲りで、北斎から「美人画ではお栄にかなわない」とまで言われたそうだから、すごい。

私が本作で何よりも心地よく感じたのは、お栄が終始男言葉で語ること。これは本来違和感があるはずだが、本作で長澤まさみが演じるお栄（応為）を見ていると、それが心地よく感じるのは、男言葉でのしゃべりがお栄の生き方にぴったり適合しているためだ。本作には善次郎（高橋海人）との微妙な関係も少し描かれるが、それが恋愛関係や男女関係まで進まないのは、そんなお栄の価値観や生き方を考えれば当然かも・・・。

■□■北斎の晩年は？父娘の創作の旅は？■□■

前述したように、『HOKUSAI』は世界で最も有名な日本人アーティスト葛飾北斎の一生を、歌麿、写楽、馬琴などの人間関係を踏まえながら、多角的、重層的に描いた興味深い作品だった。したがって、同作の中盤では歌麿、写楽、馬琴たちの葛藤が描かれ、ラストに向けては「68歳で脳卒中を克服、娘と旅へ、創作意欲は？」「表現の自由を守れ、その悪いは？その結末は？」が興味深く描かれていた。しかし、葛飾応為の人生に焦点を当てた本作のラストに向けては、『HOKUSAI』と同じく68歳で脳卒中を克服した北斎が「俺の描きたいものを描く」ために、お栄と二人で「創作の旅」に出かける姿が描かれる。そこで北斎が完成させたのが「富士と笛吹童図」「富士越龍」「富嶽百景」等の作品だ。

他方、本作で見逃してならないのは、北斎の人生の最後を飾る旅（スケッチ旅行）の中で交わされる父娘間の真剣な会話だ。何を思ったか、北斎は旅のある日、「俺の世話はもういい。お前も自分の人生を生きるんだ。自分の好きなことをやれ」と語ったが、それに対するお栄への反発は？北斎の言葉は一見、これまで父親の人生のための犠牲になり、父親に付き添ってくれた娘への感謝と、これからはもう解放してやるという別れの気持ちを正直に述べたものだが、それに対してお栄は「何を言ってんだ！俺が好きなように生きた結果がお前を世話することになっただけだ。ベラボウめ」という気持ちだったから、それを父親が分かってなかったのかという悔しい感情が爆発したのは仕方ない。女優・長澤まさみは本作でそんな感情の爆発を素晴らしい演技で披露しているので、本作ではそんなハイライトシーンをしっかり受け止めたい。

そんなお栄の、女流浮世絵師としての生き方と北斎の娘としての生き方は北斎が90歳で死亡するまでは明らかだが、それ以降は全くわからないそうだ。彼女が残した数点の作品は残っているが、お栄の晩年から死ぬまでの形跡が不明なのは実に残念。誰かしっかり調べてほしいものだ。

2025（令和7）年12月3日記